

切り石 遺跡群

2009年2月

長野県飯田市教育委員会

切り石 遺跡群

2009年2月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。そして、美しい自然に恵まれ、長い歴史と貴重な伝統文化に包まれた、人情豊かなまちとして知られています。

伊那谷の歴史は古く、3万年以上も前に遡ることができます。それ以降、連綿と人々の生活が残されていますが、特に古墳時代と中近世に飯田は隆盛期を迎えます。

切石遺跡群が存在する鼎地区は、飯田の中心市街地の南側にあたります。もともと宅地、商業地として栄えた鼎町でありましたが、近年ますます発展しその姿を変えつつあります。この発展は、道路網の整備と車社会の発達によるところが大きいといえますし、こうした中で、さらに車社会の充実を推し進めることは、自然の成り行きといえましょう。

計画地一帯は埋蔵文化財包蔵地「切石遺跡群」の一画にあたります。埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身近に感じられることが難しいかと思います。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の足跡を示しており、この地の歴史を雄弁に語ることができます。このような文化財は、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存するのが最善といえますが、現代社会の基盤整備との間では記録保存により後世に伝えることもやむを得ないことを考えております。

今後、本書が広く活用されるとともに、地域の皆様に歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご理解を賜りご協力いただきました、飯田建設事務所に、深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成21年2月

長野県飯田市教育委員会

教育長 伊澤宏爾

例　　言

1. 本報告書は、住宅市街地基盤整備（街路）工事に先立ち実施された、飯田市鼎切石4682-2他所在の埋蔵文化財包蔵地 切石遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田建設事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、羽生俊郎が担当した。平成18・19年度に現地調査を、平成20年度整理作業および報告書作成作業を行った。
4. 調査時の図面類・遺物の注記には、「KKI4682-2」の記号、遺構には以下の記号を用いた。
SM：周溝墓、SK：土坑、SX：不明遺構
5. 本遺跡に於ける発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画、VII-LC 74 22-35（社団法人日本測量協会 1969「国土基本図式 同適用規定」参照）を中心に位置する。グリット設定は世界測地系に基づく飯田市新埋蔵文化財基準メッシュを、有限会社M 2クリエーションに委託した。
6. 土層観察については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』による。
7. 遺構・遺物の計測値のうち、未調査・破壊・破損等の数値は現存値を（ ）内に示した。
8. 遺構実測図の線については、上端は太線、下端は細線、破線は推定のライン等を表し、数値については、検出面からの深さ(cm)を表現している。
9. 遺物実測図におけるスクリーントーンは、黒色処理・剥離・欠損等を表現している。
10. 本書は羽生俊郎が執筆・編集し、山下誠一が総括した。現場での遺構写真は羽生俊郎が撮影し、遺物写真については、西大寺フォト 杉本和樹に委託した。
11. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

本文目次

序		第2節 歴史概観	6
例言		第3章 調査の結果	9
目次		第1節 調査区の設定	9
第1章 経過		第2節 基本層序	12
第1節 調査に至る経過と過程	1	第3節 遺構	12
(1) 調査に至る経過	1	(1) 周溝墓	12
(2) 調査の経過	1	(2) 土坑	14
(3) 作業日誌	2	(3) 小穴	16
第2節 調査組織	3	(4) 不明遺構	16
(1) 調査団	3	第4節 遺物	27
(2) 事務局	3	第4章 まとめ	31
(3) 指導・協力	3	引用参考文献	33
第2章 遺跡の環境		抄録	51
第1節 地理	5		

挿図目次

挿図1 遺跡位置図	4	挿図13 遺構全体図	17
挿図2 調査区位置図	7	挿図14 小穴割付図	17
挿図3 基準メッシュ図区画方法1	8	挿図15 小穴1	19
挿図4 基準メッシュ図区画方法2	10	挿図16 小穴2	20
挿図5 基準メッシュ図区画方法3	10	挿図17 小穴3	21
挿図6 基準メッシュ図区画方法4	11	挿図18 小穴4	22
挿図7 基準メッシュ図区画方法5	11	挿図19 小穴5	23
挿図8 基本層序	12	挿図20 小穴6	24
挿図9 SM01	13	挿図21 小穴7	25
挿図10 SK02~04	14	挿図22 小穴8	26
挿図11 SK01	15	挿図23 SM01	28
挿図12 SX01	16	挿図24 SK01・遺構外	29

写真図版

図版 1 遺跡遠景・調査前	37	図版 9 作業風景	45
図版 2 I 区全景・I 区全景	38	図版10 古墳時代中期土器	46
図版 3 II 区全景・III 区全景	39	図版11 SM01・SK01	47
図版 4 IV 区全景・試掘調査区	40	図版12 SK01	48
図版 5 SM01・SM01・SM01出土状況	41	図版13 SK01	49
図版 6 SK01・SK01遺物出土状況	42	図版14 遺構外出土遺物	50
図版 7 SK02・SK03・SK04	43		
図版 8 SX01・柱穴群（I 区）・ 柱穴群（III 区）	44		

第1章 経過

第1節 調査に至る経過と過程

（1）調査に至る経過

平成18年9月4日付けで飯田市追手町2丁目678 飯田建設事務所長より、文化財保護法第94条第1項による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。事業計画は埋蔵文化財包蔵地羽場坂遺跡および切石遺跡群内において県道を建設するものである。羽場坂遺跡は縄文時代と古墳時代の遺物が採集されているが、本格的な調査事例ではなく遺跡の詳細は不明である。切石遺跡群については、周辺部での発掘調査の結果、平安時代の住居址・溝址と縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。そのため、事業実施に先立っては試掘調査を実施し、その結果に基づき改めて協議するものとした。

平成18年11月2日付けで飯田建設事務所長 北原正義と飯田市長 牧野光朗との間で「平成17年度地方道路交付金（街路）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託 羽場大瀬木線 飯田市 羽場～切石」を締結し、12月25日～1月4日にかけて試掘調査を実施した。その結果、羽場坂遺跡では遺構遺物が確認されず、氾濫原と判断され埋蔵文化財の保護措置は不要とした。切石遺跡群については、古墳時代中期の土坑が確認されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとした。

これを受け、平成19年10月11日付けで、飯田建設事務所長 北原正義と飯田市長 牧野光朗との間で「平成19年度 住宅市街地基盤整備（街路）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託」を締結し、本調査を実施した。また、平成18年度に試掘調査を実施できなかった個所を本調査に併せて試掘調査を実施し、本調査の要否を判断することとした。

（2）調査の経過

以上の経過を経て、平成19年10月15日から発掘調査を開始した。重機により表土・舗装等を除去した後、手作業で遺構の検出・掘削を行ない、図化・写真撮影等の記録を行なった。排土の都合により、調査対象区域をI～IV区に分けて調査を進行した。調査終了後は、重機により埋め戻しを行なった。

試掘調査は12月7日に実施した。重機で遺構検出面まで掘り下げた後、遺構等の有無を判断し、委託により図化を実施した。全ての現地作業を終了したのは、12月19日であった。

平成20年度は飯田市考古資料館において、図面・写真類の整理、出土遺物の実測等の作業を行ない、報告書刊行を行なった。また平成20年度の事業に関しては、平成20年6月13日付けで、飯田建設事務所長 平沢清と飯田市長 牧野光朗との間で「平成20年度 住宅市街地基盤整備（街路）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託」を締結し、これにあたった。

(3) 作業日誌

平成19年10月

- 15日（月） 調査開始。重機作業。
16日（火） 重機作業。
17日（水） 基準点設置。機材搬入。遺構検出。
18日（木） 遺構検出。
19日（金） 遺構検出。
22日（月） SM01他掘削。
23日（火） SM01他掘削、実測。
24日（水） SM01他掘削、実測、写真撮影。
25日（木） SM01、柱穴群他掘削、実測。
26日（金） 雨天現場中止。
29日（月） 調査区全景写真撮影、遺構実測。
30日（火） II区調査開始。重機作業。
県教育委員会西山指導主事現地指導。
31日（水） 重機作業。

平成19年11月

- 1日（木） 基準点設置。
2日（金） 遺構検出。
5日（月） 遺構検出。SK01実測、写真撮影。
6日（火） 雨天現場中止。
7日（水） SK01他掘削、実測。
8日（木） SK01・柱穴群他掘削、実測。
9日（金） SK01・柱穴群他掘削、実測。
12日（月） 写真撮影準備。
13日（火） 調査区全景写真撮影。遺構掘削。
14日（水） 現場中止。
15日（木） 遺構実測。
16日（金） 遺構実測。II区終了。
19日（月） 重機作業。
20日（火） 重機作業。
21日（水） III区調査開始。重機作業。
22日（木） 遺構検出。
23日（金） 祝日。
26日（月） 基準点設置。遺構検出、掘削。
27日（火） 遺構等掘削、実測。
28日（水） 遺構等掘削。
29日（木） 遺構等掘削。
30日（金） 遺構等掘削、実測。

平成19年12月

- 3日（月） 雨天現場中止。
4日（火） 調査区全景写真撮影。III区終了。
5日（水） 現場中止。
6日（木） IV区調査開始。重機作業。遺構検出。
7日（金） 遺構検出。基準点設置。
10日（月） 遺構検出、掘削。
11日（火） 遺構検出、掘削、実測。
12日（水） 遺構掘削、実測。
13日（木） 雨天現場中止。
14日（金） 現場中止。
17日（月） 写真撮影準備。
18日（火） 調査区全景他写真撮影。
19日（水） 重機作業。機材搬出。IV区終了。

第2節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 伊澤 宏爾			21
調査担当者	羽生 俊郎			
調査員	瀧谷恵美子	下平 博行	坂井 勇雄	
発掘作業員	唐沢古千代	小島 康夫	椎名 祥二	関島真由美 竹本 常子
	中平けい子	福沢トシ子	松下 省三	宮内真理子
整理作業員	伊東 裕子	金井 照子	小平まなみ	関島真由美 竹本 常子
	中田 恵	中平けい子	中村地香子	福沢 育子 松本 恵子
	宮内真理子	森藤美知子	森山 律子	吉川 悅子

(2) 事務局

飯田市教育委員会

教育次長	中井 洋一 (平成18年度)	関島 隆夫 (平成19年度～)
生涯学習課長		小林 正春 (平成18年度)
生涯学習・スポーツ課長		宇井 延行 (平成19年度～)
生涯学習・スポーツ課長補佐		竹前 雅夫 (平成19年度)
文化財保護係長	馬場 保之 (平成18年度)	山下 誠一 (平成19年度～)
文化財保護係	宮澤 貴子 瀧谷恵美子	下平 博行 坂井 勇雄 羽生 俊郎

(3) 指導・協力

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

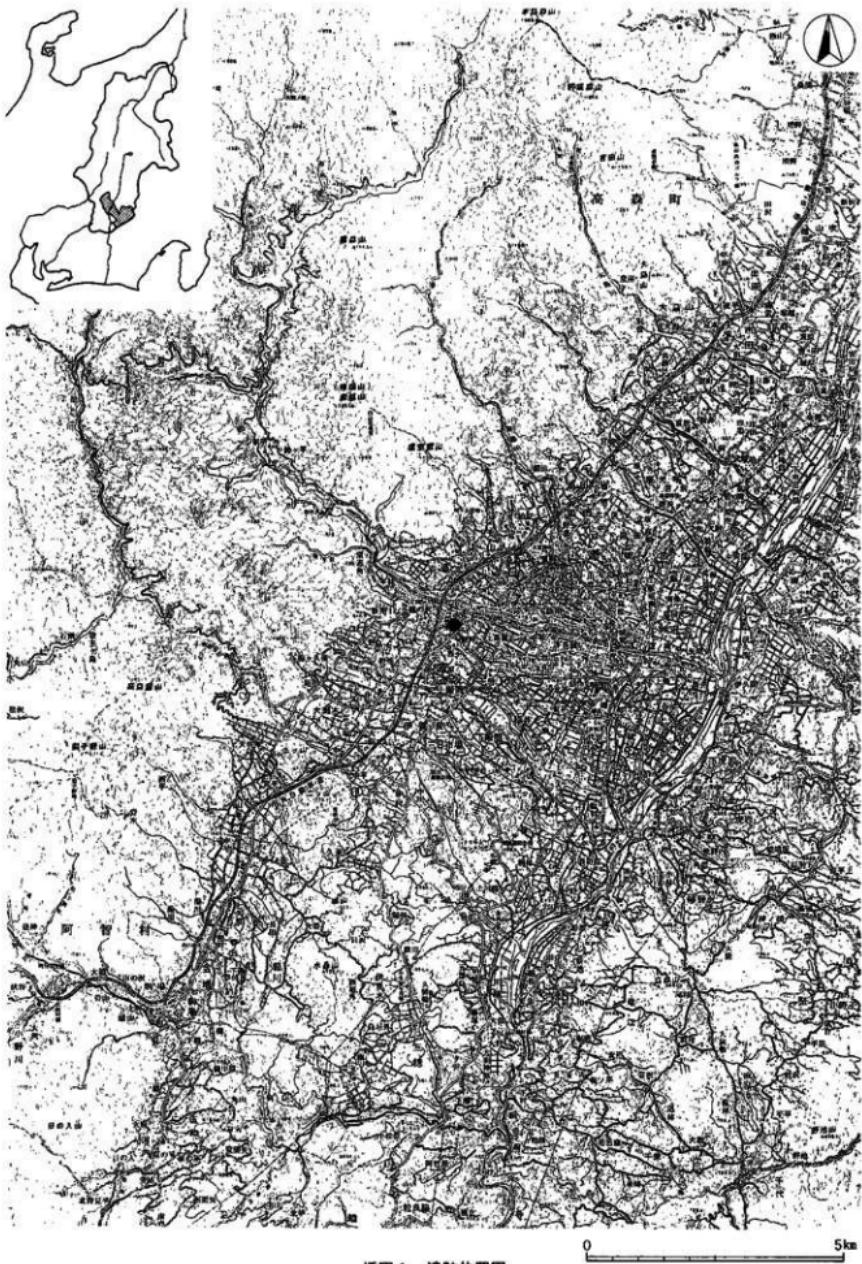


図1 造跡位置図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理 (挿図1・2 図版1)

飯田市は、長野県の南部を並走する中央アルプスと南アルプスに挟まれた、一般に伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南部を中心とし、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併したことにより、赤石山地と伊那山脈に挟まれた遠山郷と呼ばれる地域も含んでいます。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央を天龍川が南流する。天龍川は約250万年前に流れ始め、約200万年前に南アルプスが、統いて約80万年前から中央アルプス・伊那山脈が急速に上昇を始めて形成された。この上昇は山地と沖積地の間に逆断層を形成させ、幾重もの段丘を発達させた。この段丘は伊那谷の地形的特徴であり、地質学上では、火山降下物の堆積を基準として、高位面・高位段丘・古期扇状地・中位段丘・中期扇状地・低位段丘Ⅰ・新期扇状地・低位段丘Ⅱの5つに大きく編年されている(下伊那地質誌編纂委員会 1976『下伊那の地質解説』)。一般的には、上段と呼ばれる高燥地と、下段と呼ばれる低湿地に大別される。そして、天龍川に注ぎ込む支流により分断されて、見事な田切地形となっている。これに支流によって形成された扇状地、自然堤防が加わり、より複雑な地形となっている。

地理的にみると、北は諏訪地方・塩尻地方に、南は天龍川と秋葉街道伝いに遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに三河地方へそれぞれ通じており、長野県の南の玄関口といえる場所にある。このような地理的条件から交通の要衝といえ、多くの街道が飯田を通過・起点としている。伊那街道は明治以降三州街道と呼ばれ、三河地方に通じ、現在国道153号線となっている。遠州街道は天龍川にそって遠州地方へと通じており、現在の国道151号線が該当する。秋葉街道は松尾の八幡を起点とし、小川路峠で伊那山脈を越えて遠山郷に至り、青崩峠或いは兵越峠を越えて秋葉神社へ通ずる。現在の国道256号線及び同152号線がほぼ該当する。大平街道は県道 幸助・飯田線が該当し、中山道へと通する。いずれも中世末期から近世にかけて整備され、およそ現在の路線となった。近世には中馬が発達し、これらの街道を多くの文物が流通した。当遺跡は東西を国道151・153号線に挟まれる形となっている。

遺跡の所在する鼎地区は、天龍川支流の飯田松川の右岸一帯である。東～南側は比高差およそ30mの高燥した中位段丘となっており、松尾地区・伊賀良地区と接する。西側は中央アルプス前衛の山々である。当遺跡は飯田・下伊那地方(以下、飯伊地方と略す)の地質編年で2番目に若い低位段丘上に位置する。飯田松川の影響を受けやすく、比較的湿地化している個所が多い。周辺には氾濫時に運ばれてきた巨石が多く、切石の地名の由来となっている。調査地点の標高は505m前後、飯田松川河床との比高差はおよそ20mを測る。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超える、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量は年間雨量約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少ない。こうした地理的・気候的条件により、飯伊地方には暖地性から高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なる。

第2節 歴史概観

飯田市の初源は、少なくとも旧石器時代初頭まで遡ることができる。しかし、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての飯田市は遺跡数が少なく、地区内でも断片的に石器が出土している程度である。

市内では、縄文時代に入ると河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在し、その後、西側の山麓周辺に遺跡が集中し、時期が下るとともに台地先端へと遺跡の分布が広がる傾向がある。中期に入ると爆発的に集落が増加し、地区内でも切石遺跡群・柳添遺跡等に集落が認められる。後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、河川に面した低位段丘に遺跡が分布する特徴がある。

弥生時代でも前期の遺跡数は少なく不明瞭な点が多い。稻作の定着したといわれる弥生時代中期に入ると遺跡数が増加し、下段の低湿地に面した位置に集落が営まれる。後期に入ると下段の集落はさらに発展し、上段の高燥地にまで集落が広がるようになる。段丘崖下や扇端部付近で発達する湧水や、小河川を利用した水田耕作や台地上の畑作が生活基盤であったと推定され、古墳時代前期まではこうした状況が続くと考えられている。

古墳時代中期後半から後期にかけて、飯田市内には多数の古墳が築造される。市内古墳の特徴として、馬具・馬の墓壙が多く出土していることがまず特筆される。こうした馬に関する遺物・遺構の豊富さから、牧を生産基盤とした集団と、古墳の形態や出土遺物から渡来系の集団の存在が指摘されている。現在鼎地区には消滅したものも含めて12基の古墳を確認されており、いずれも後期の円墳とみられている。当遺跡の立地する段丘には、縁辺に沿って現在4基の古墳が確認されているが、下伊那史第2巻によれば、かつては7基あったとされる。現在の行政区画は伊賀良地区になるが、南側の上段の縁辺には6基の円墳が存在したとされている。この時代の集落としては、当遺跡西端（旧 天伯A・B遺跡・山岸遺跡。平成9年度の遺跡地図改正により遺跡名変更。）で古墳時代中期から後期にかけての住居址と祭祀遺構が調査されており、伊那谷の本格的な古墳築造の開始期にあたる集落として注目されている。

奈良時代、座光寺地区の恒川遺跡群では正倉城等が確認されており、古代伊那都術に比定されている。鼎地区は、古代には伊那郡輔衆郷（いなぐんふすごう）に、中世には伊賀良庄に含まれていた。伊賀良庄は、康平6年（1063）頃には既に近江国妙香院領となっていたが、鎌倉時代文治2年（1188）には既に尊勝寺の所領となっており、以降、皇室関係御家の荘園であった。そして鎌倉時代当初より北条氏の一族である江馬氏が地頭として補任され、四条金吾を地頭代として派遣していた。四条金吾は殿岡に居住していたとみられている。室町時代以降は、小笠原氏が信濃國守護と伊賀良庄地頭を務めたが、松尾・鈴岡・深志の三家に分かれ宗家争いを展開した。室町時代において鼎地区は、山洞之郷南方、山洞之郷東方、及び長熊之郷と記されており、現在の伊賀良地区との境界は不明瞭であったといわれている。

天文23年（1554）、武田氏が伊那谷を侵攻した。伊那谷の諸侯は武田氏の下に服従し、天正10年（1582）、織田信長の武田氏追討に際してはこれに従った。さらに徳川・豊臣氏による伊那谷統治を経て、鼎地区は近世において堀家が藩主を務める飯田藩の所領となった。この時代、松川を境とし松川以南の16ヶ村を下郷と呼び、それぞれ郷代官を置いて統治した。当切石地区は、山村と呼ばれていた。

明治8年（1875）、山村、一色村、名古熊村が合併して鼎村が誕生し、その後分離合併を繰り返し、昭和59年度に飯田市と合併し、現在の行政区画となった。

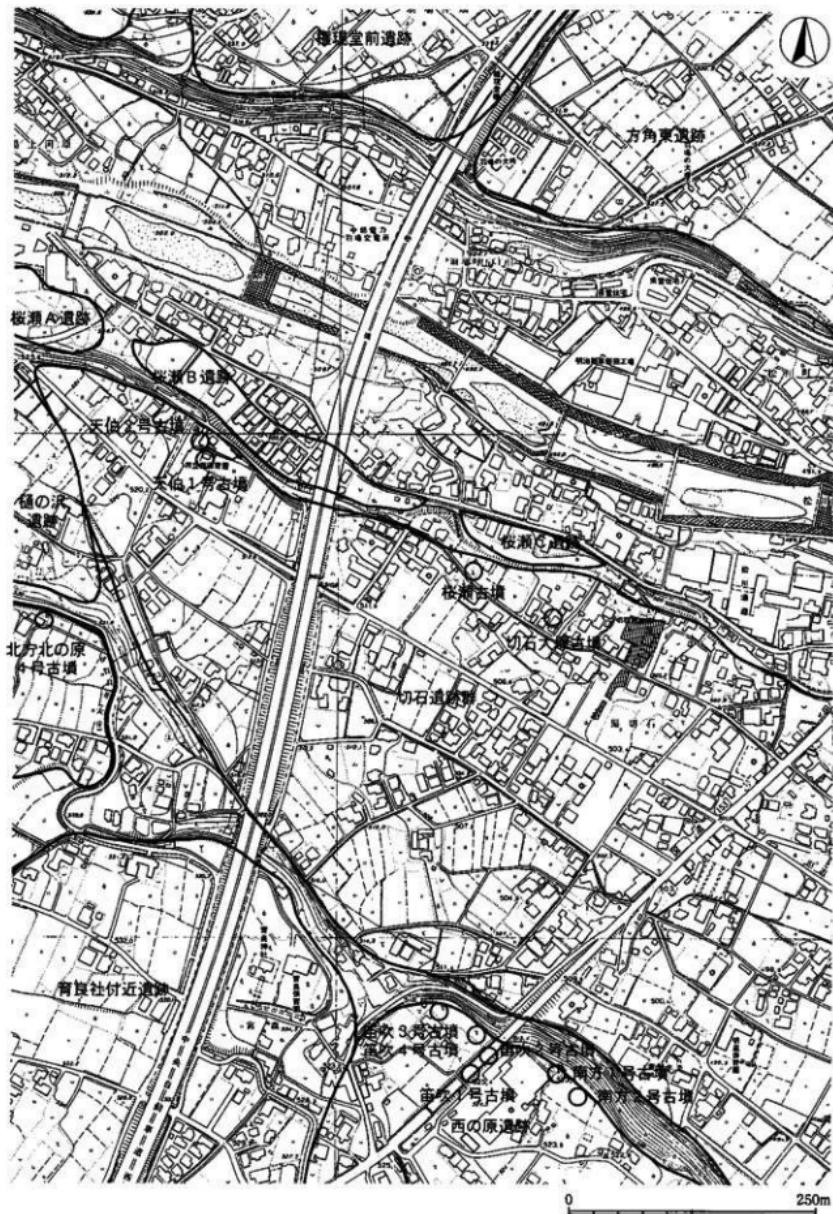
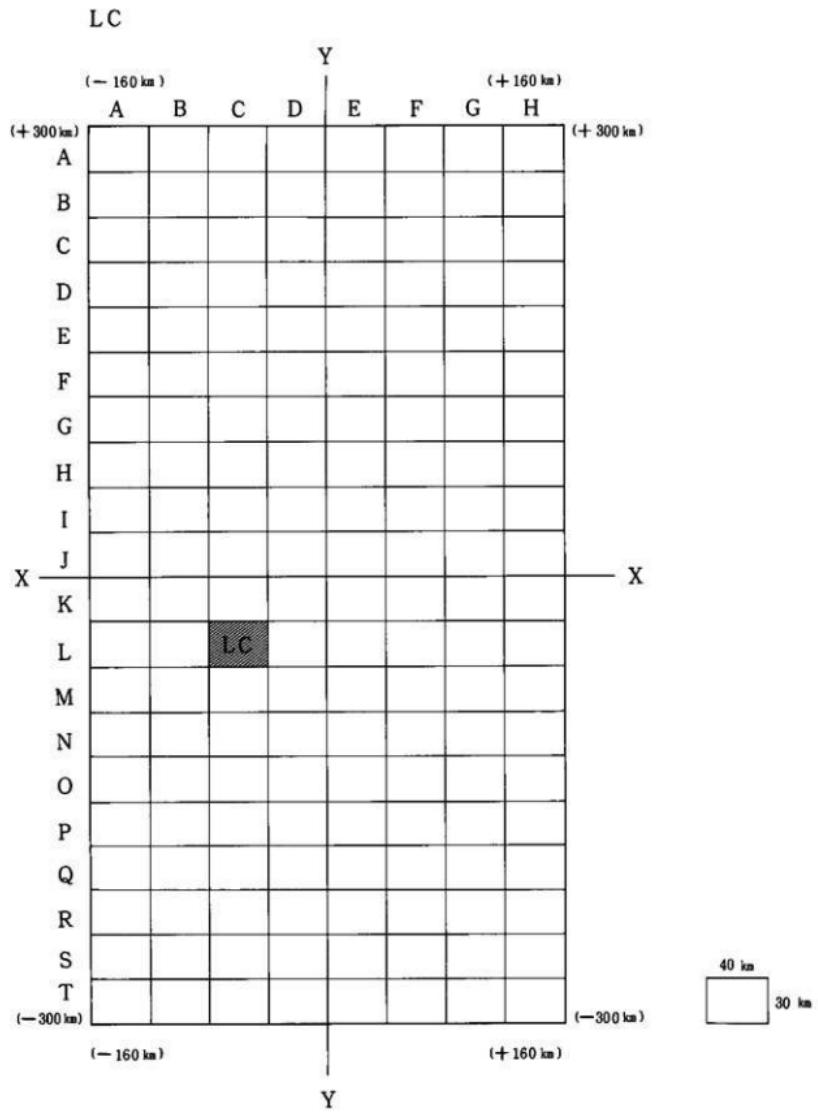


図2 調査区位置図



掲図3 基準メッシュ図区画方法1

第3章 調査の結果

第1節 調査区の設定 (挿図2～7)

調査地は飯田市鼎切石4682番地2他、調査前は宅地および農地であった。調査は1512m²を実施した。発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、VII-Lc 74 22-35を中心とする。飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図(以下、基準メッシュ図と略す)については、1:50000大縮図地形図(国土基本図)の区画に準じ(社団法人 日本測量協会 1969『国土基本図式同適用規定』)、以下のとおりに区画する。

- (1) 基準メッシュ図の1図葉は、昭和43年建設省告示第3059号に示す平面直角座標系による「横メルカトル図法」とする。
- (2) 基準メッシュ図の1図葉は、座標系(飯田市は第VII座標系に属するので、座標系番号は省略する)のY軸およびX軸を基準として、南北300km東西160kmを含む地域を、30km×40kmの長方形に分割して区画を定め、例えばLCのようにアルファベット大文字の組み合わせにより区画名を表示する(挿図3)。
- (3) 30km×40kmの長方形区画を100等分して、3km×4kmの1:5000図葉に相当する区画に分割する。1:5000はアラビア数字で区画番号を定め、座標系の区画を横線に結んだ後に続けて、例えばLC-74のように表示する(挿図4)。
- (4) 1:5000図葉を25等分して、0.6km×0.8kmの長方形小区画に分割する。区画番号は挿図5のごとく定め、例えばLC-74 22のように表示する。
- (5) 0.6km×0.8kmの長方形小区画を48分して、100m×100mの正方形区画に分割する。区画番号は挿図6のごとく定め、例えばLC-74 22-35のように表示する。
- (6) 100m×100mの正方形区画を2500等分して、2m×2mの正方形小区画(グリッド)に分割する。区画の名称は、正方形区画の南から北に向かってCA～CY・DA～DY、西から東に向かって0～49とし、例えばCU-12のように表示する(挿図7)。

LC - 74

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
60	61	62	63	64	65	66	67	68	69
70	71	72	73	74	75	76	77	78	79
80	81	82	83	84	85	86	87	88	89
90	91	92	93	94	95	96	97	98	99

4 km
3 km

挿図 4 基準メッシュ図区画方法 2

LC - 74 22

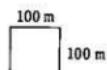
1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

0.8 km
0.6 km

挿図 5 基準メッシュ図区画方法 3

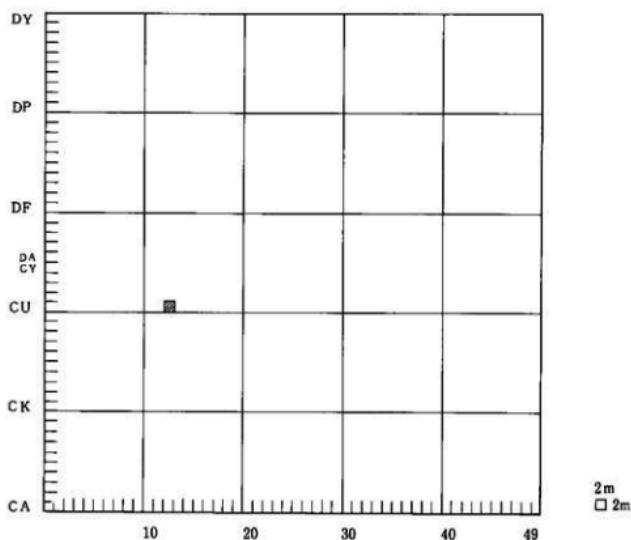
LC - 74 22 - 35

1	2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31	32
33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48



擇図6 基準メッシュ図区画方法4

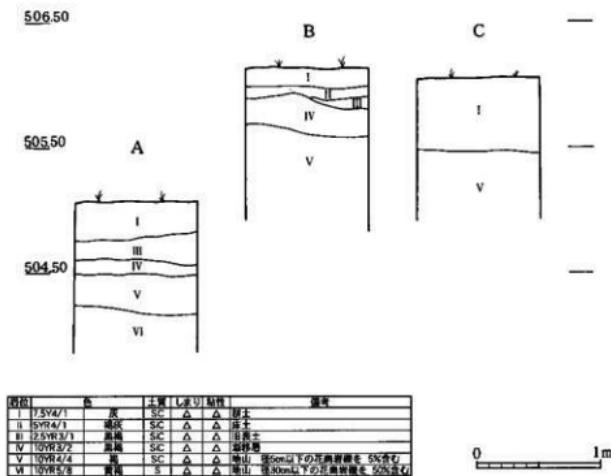
LC - 74 22 - 35 CU 12



擇図7 基準メッシュ図区画方法5

第2節 基本層序（挿図8）

遺構検出面である地山はV層で、下層ほど砂礫を多く含み、VI層では完全に砂礫層となる。かつて松川の氾濫原であった時の堆積層とみられ、場所によっては1m前後の巨石を包含していた。一帯は、農地および宅地として利用されていた場所であったが、もともとⅢ・Ⅳ区をピークとするなだらかな丘状の地形であったとみられる。Ⅲ・Ⅳ区の漸移層と地山上部は削平されており、VI層が表土直下に露出する状況であった。古墳時代を中心とする遺構の掘り込みは、IV層上面からなされている。しかし、IV層上面で遺構を平面的に捉えることが困難であり、調査にあたってはV層上面まで掘り下げた。



挿図8 基本層序

第3節 遺構

(1) 周溝墓（挿図9 図版5）

周溝墓01 (SM01)

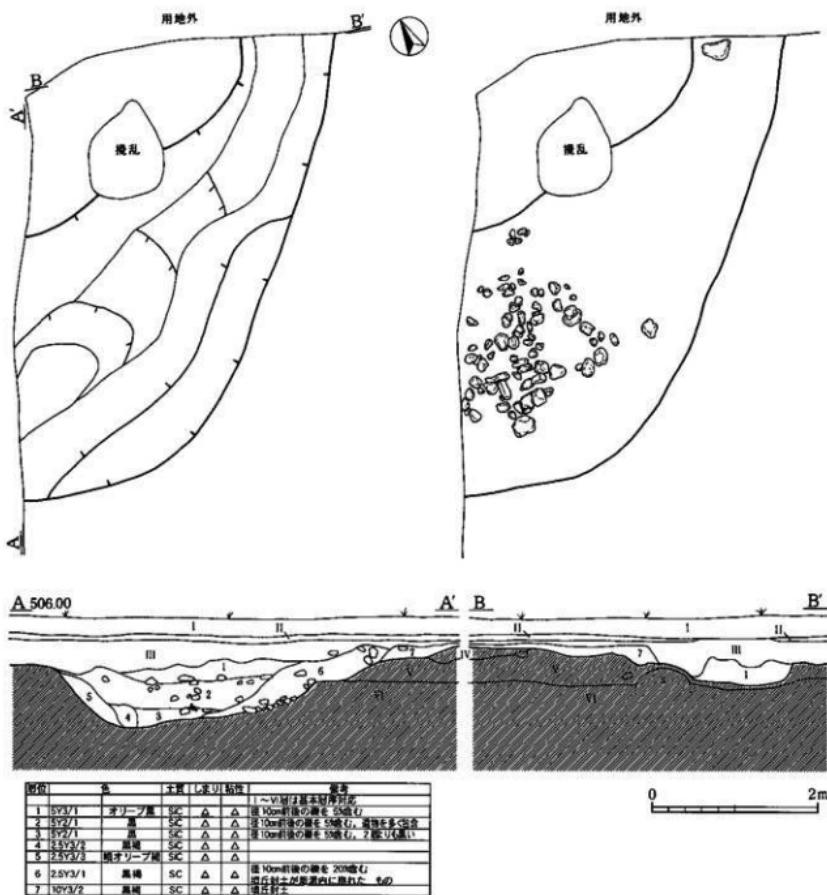
DK-07を中心に検出した。大半は調査区外にかかっているため、規模、形状等は不明である。調査区内での周溝の最大幅は3.1m、深さは0.7mを測る。溝の底部は平坦でなく、西側ほど深く、東側ほど浅い。平面的な検出はできなかったが、土層断面を観察すると墳丘が残っていたことがわかる。調査区

外の隣接地には周辺より 2 m 前後高くなっている墓地がある。墓地は墳丘の残存で、本遺構はその周溝とみられる。周溝墓については近年、低墳丘墓との呼称がある。また、本遺構の埋葬施設は調査区外にあり、墳丘の規模や埋葬施設は調査できなかったが、古墳の可能性もある。今次発掘調査では周溝を確認しただけなので、単に周溝墓として扱った。

周溝内には拳大～小児人頭大の礫が落ち込んでいた。礫は比較的小さく大きさも不均一であるから、地山に混在していたものともみられ、葺石の転落かは判断できなかった。

遺物は、周溝埋土の墳丘よりの個所から、礫と混じって土器片が比較的多く出土している。須恵器の 1 点を除いて、小片が多く器形を復元するには至らなかった。その他、器種不明の鉄製品が 1 点出土している。

本遺構は、出土遺物より 5 世紀後半の遺構である。



挿図 9 SM01

(2) 土坑

土坑 01 (SK01) (挿図11 図版6)

DE-21を中心位置する。250×95cmの長方形を呈し、検出面からの深さ40cmを測る。主軸はN49°Eを示す。北東側小口の下端は横方向に変形しているが、土層等を観察しても棺材等の痕跡は確認できなかった。

本遺構は平成18年度の試掘調査時に把握したものである。試掘調査では本調査時よりも深く掘り下げ遺構の把握を行なったため、重機で若干上部を削平してしまっている。規模等は実測値よりも大きくなるものとみられる。本遺構南側には本遺構埋土4層の堆積があり、そこから鉄鏃が出土している。4層の塊の位置までがもともとの遺構の範囲であり、試掘調査時に削平してしまったものとみられる。

遺物は、拳大～小児人頭大の礫とほぼ完形の土器が3個体、底部から浮いて出土している。1は試掘時に重機に引っかかったため不明であるが、2・3は被熱して弾けたような破損をしている。埋土からは、2・3の薄片若干と4が出土している。上記のとおり、やや離れた場所から鉄鏃の茎が出土している。

本遺構は、出土遺物より5世紀後半の墓壙とみられる。

土坑 02 (SK02) (挿図10 図版7)

DD-19に位置し、150×83cmの不整形を呈し、

深さ25cmを測る。図中の石は、地山の石である。

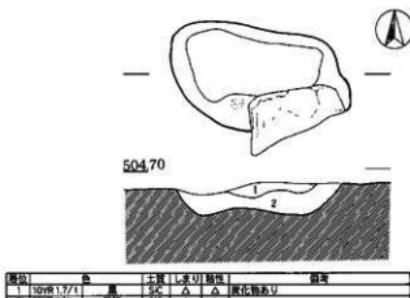
底部の一部に焼土があった。

時期、性格ともに不明である。

土坑 03 (SK03) (挿図10 図版7)

DF-20に位置し、63×59cmの円形で、深さ

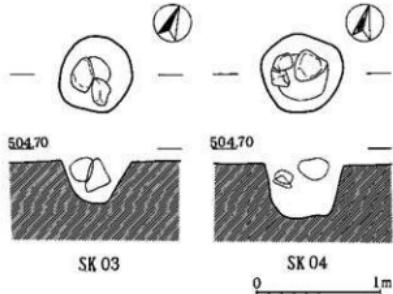
35cmを測る。石が坑内に詰まっている。時期は不明であるが、締まりのない埋土からして、比較的新しく中世以降とみられる。性格についても不明であるが、掘建柱建物址を構成する土坑で、石は裏込め石とみられる。建物の規模等は不明である。



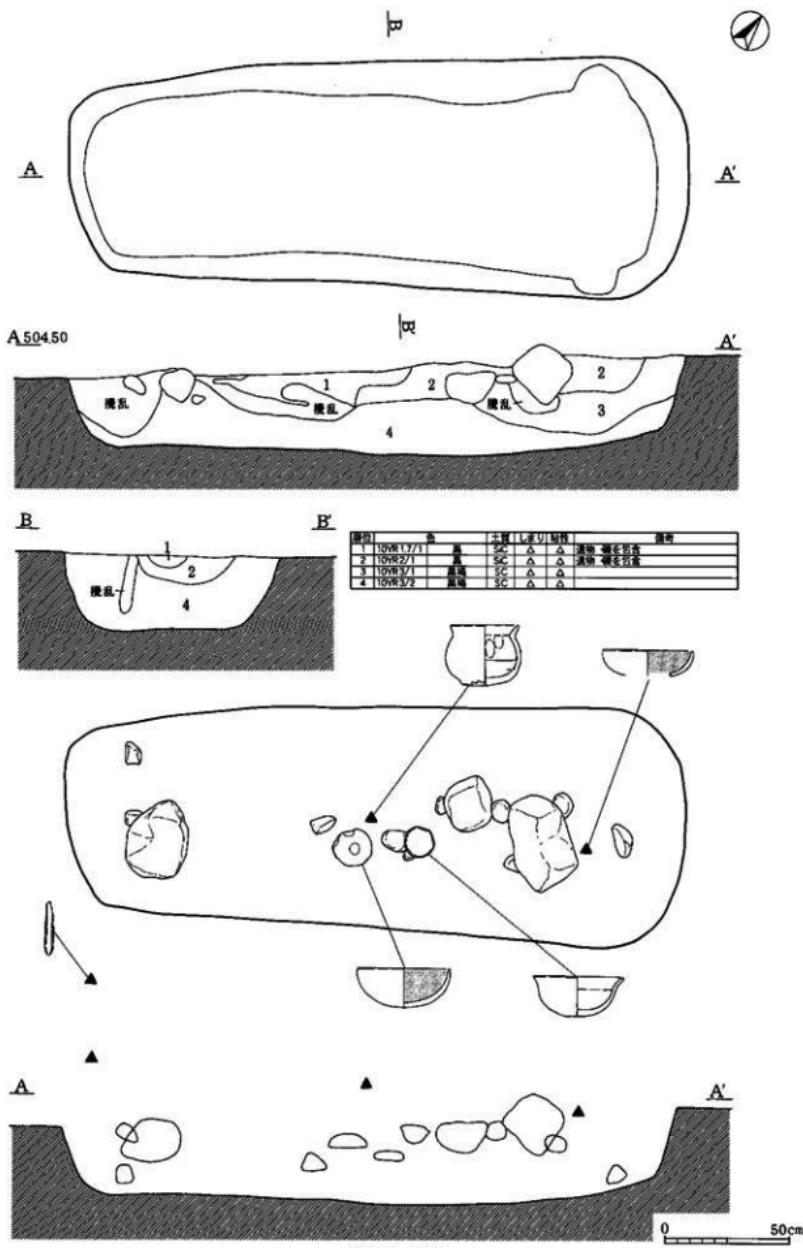
土坑 04 (SK04) (挿図10 図版7)

DF-18に位置し、65×63cmの円形を

呈し、深さ45cmを測る。坑内には石が浮いた状況で出土している。時期、性格等については、土坑03と同様、中世以降の掘建柱建物址を構成する土坑の1つとみられる。



挿図10 SK02～04



押図11 SK01

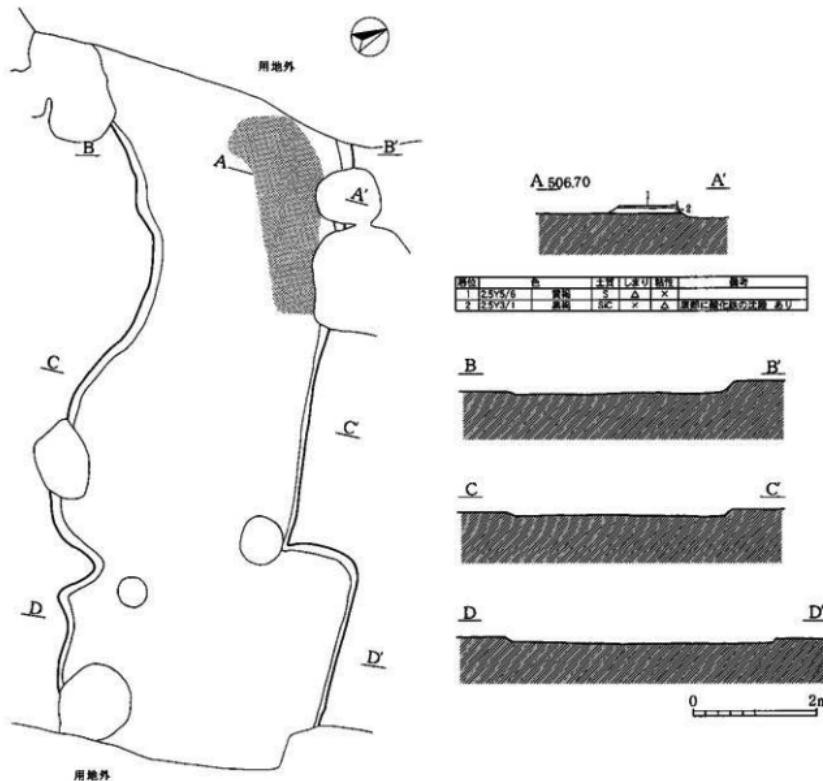
(3) 小穴 (挿図13~22 図版8)

DA-06を中心に小穴を多数確認した。市内の類例からして、中世から近世にかけての柱穴である可能性が高い。I区DA-07、III区CS-09周辺では、桁行と認識できそうなものもある。しかし、周辺は既に削平された箇所もあり、遺存状態が良くない。そのため、具体的な建物の規模や構造を記述することはできなかった。

(4) 不明遺構 (挿図12 図版8)

不明遺構 01 (SX01)

CF-01を中心に、不整形で浅い溝状の遺構を確認した。延長は11m以上、最大幅4.4m、深さ12cmを測る。一部網部で地山が硬化しており、また地山上面に酸化鉄が付着しており、水の痕跡が認められる。時期、性格ともに不明である。



挿図12 SX01

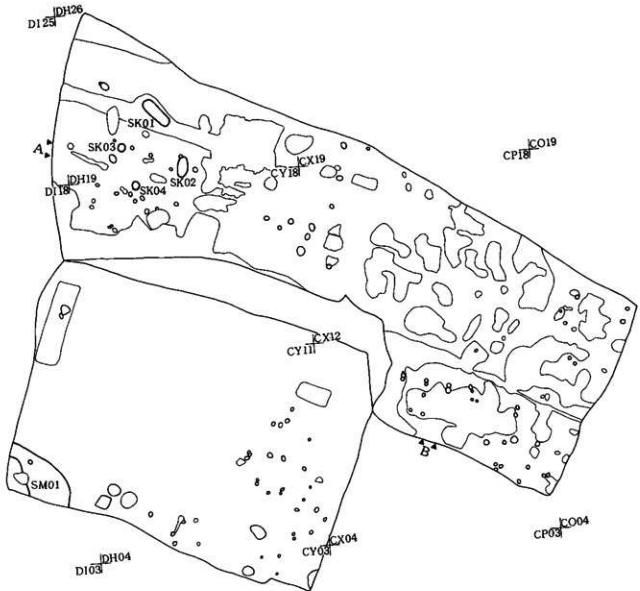
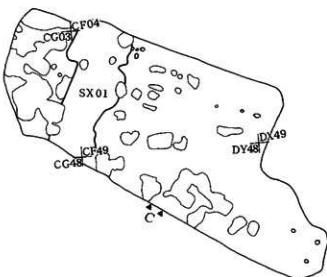


图13 造構全体図



0 15m

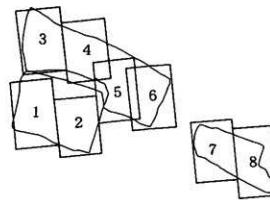
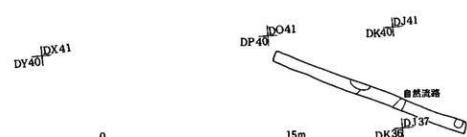


图14 小穴割付図



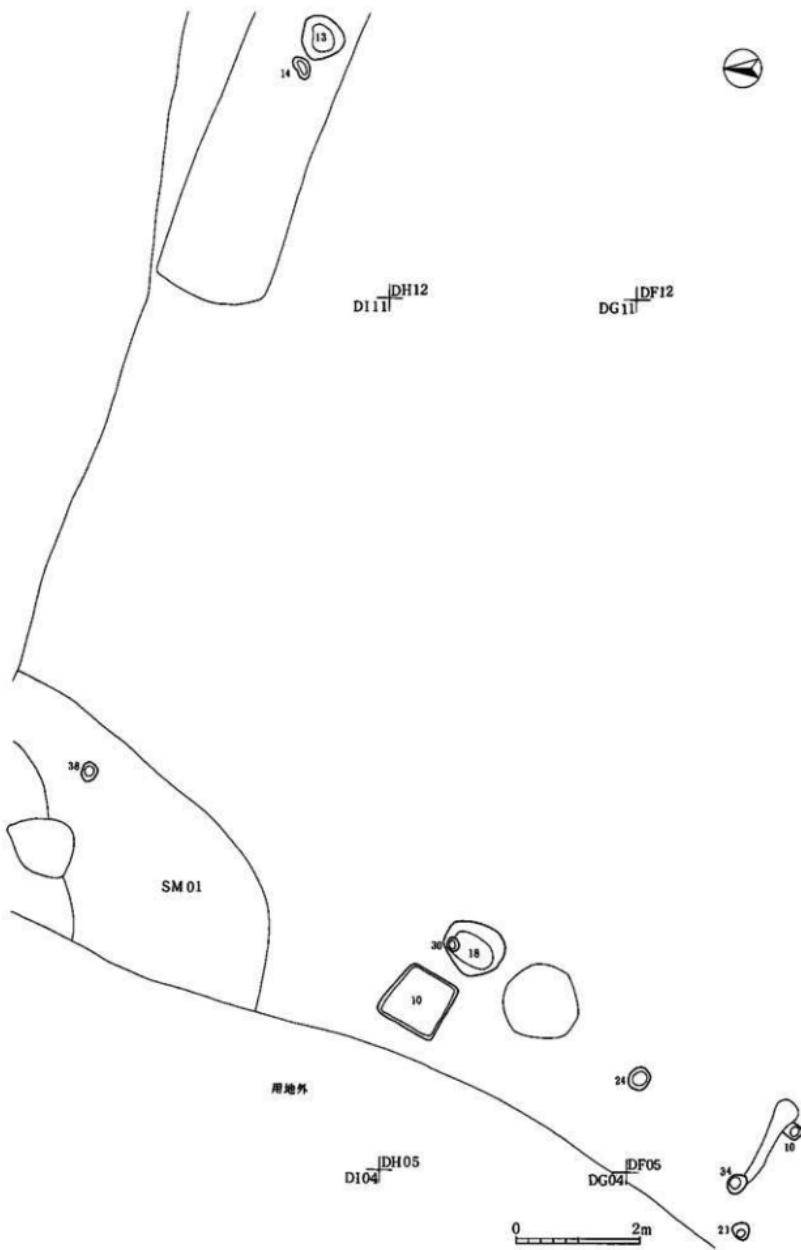
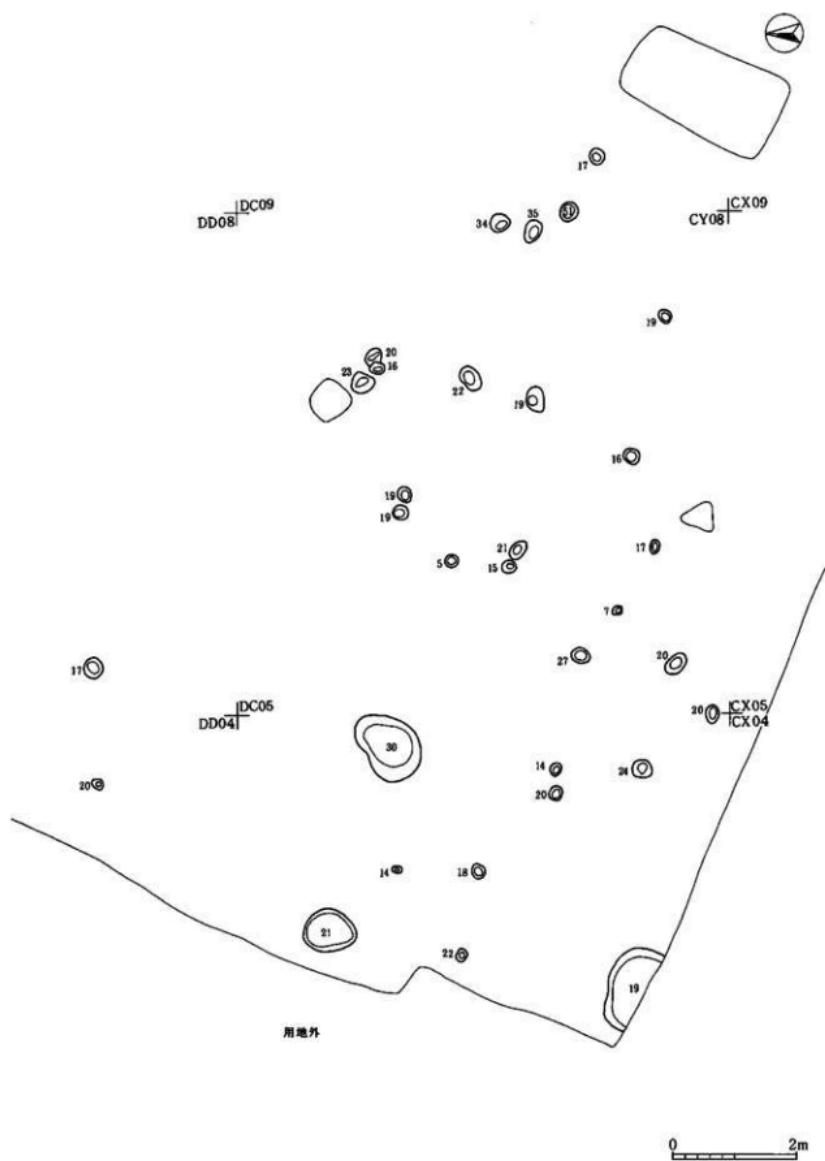


图15 小穴 1



擇圖16 小穴2

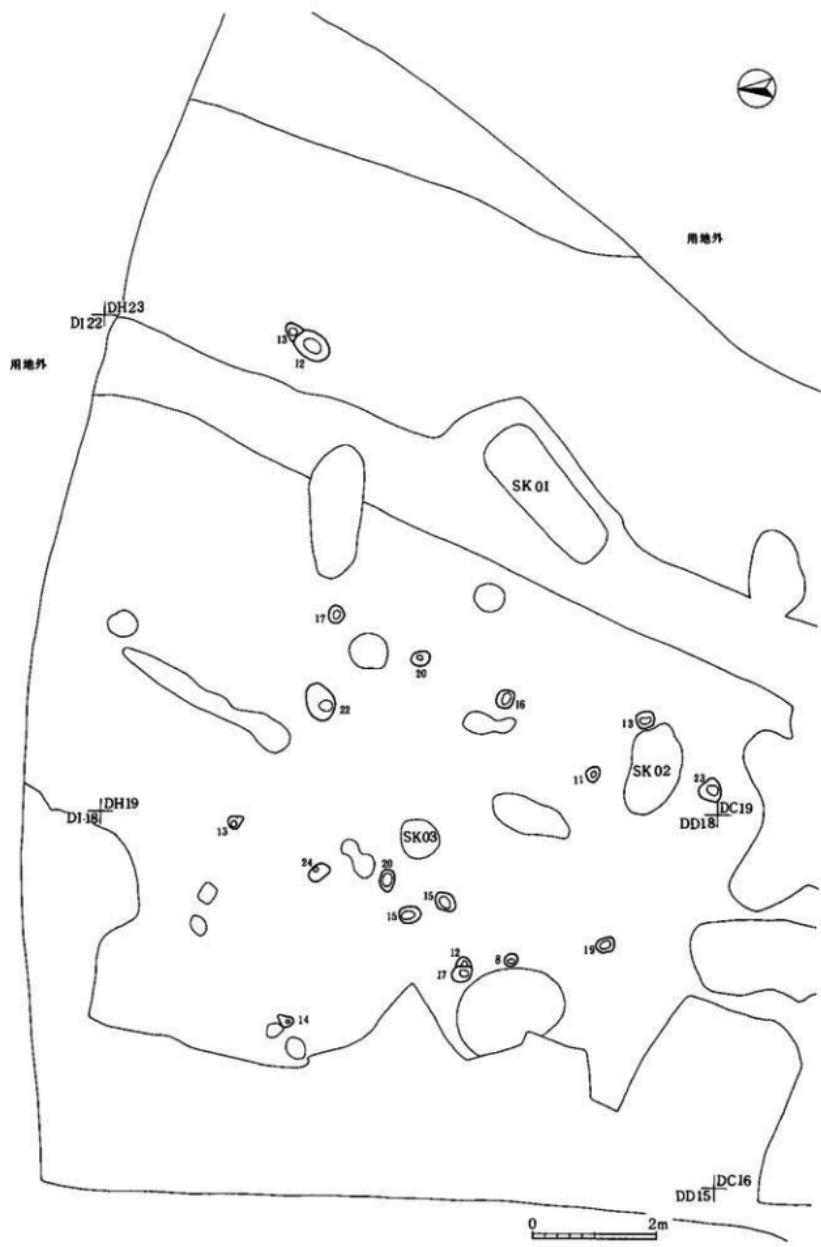


图17 小穴 3

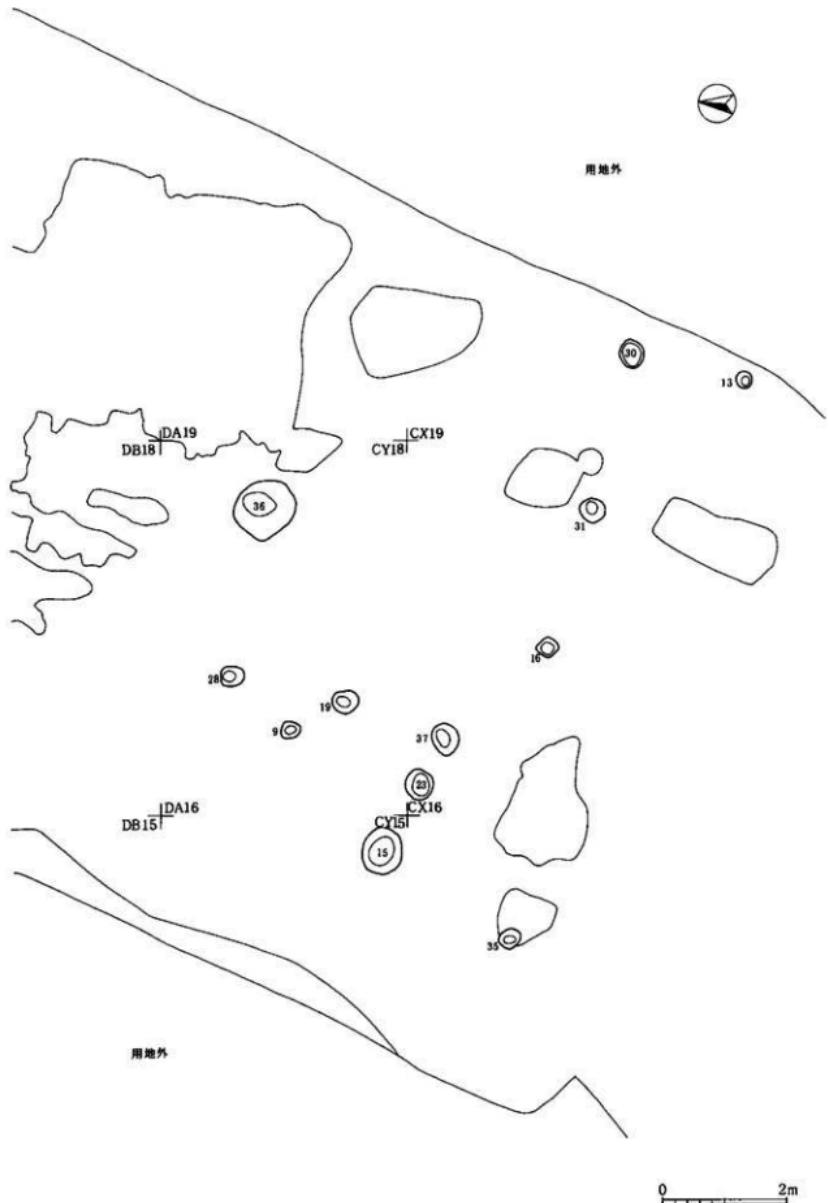


插图18 小穴4

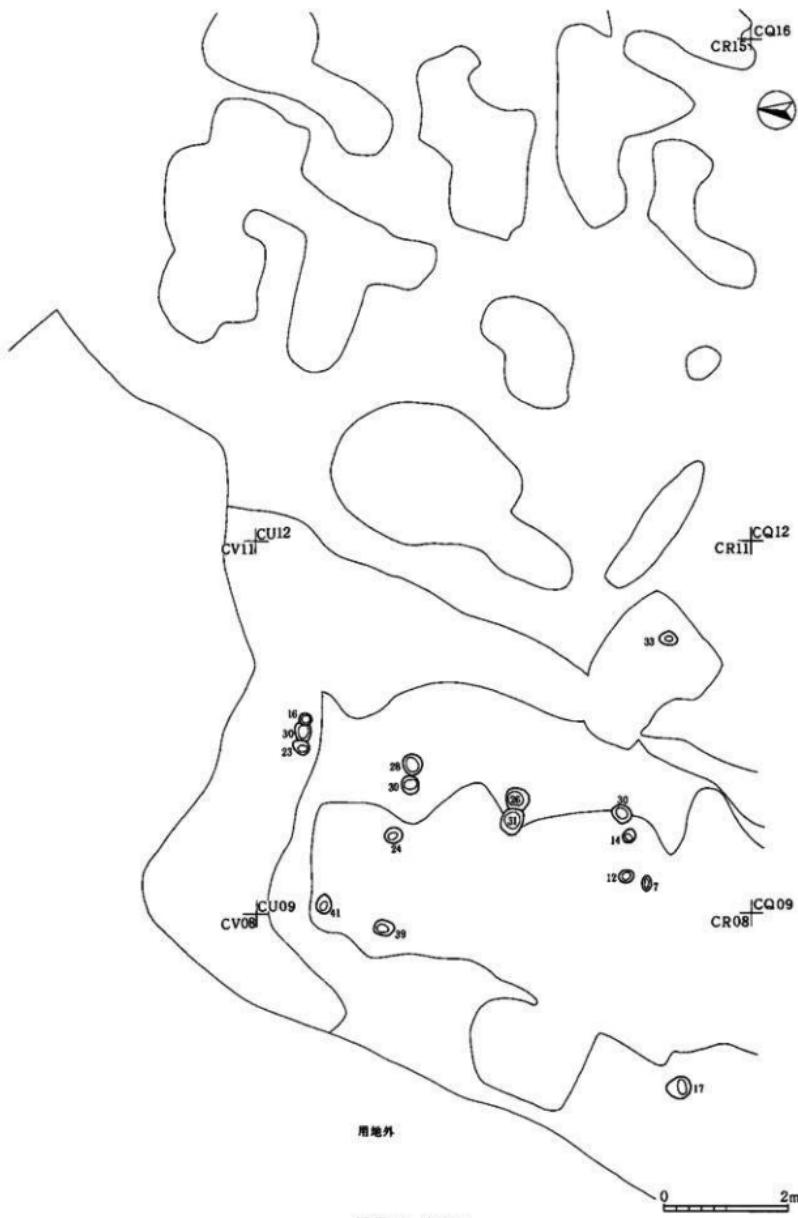


插圖19 小穴 5

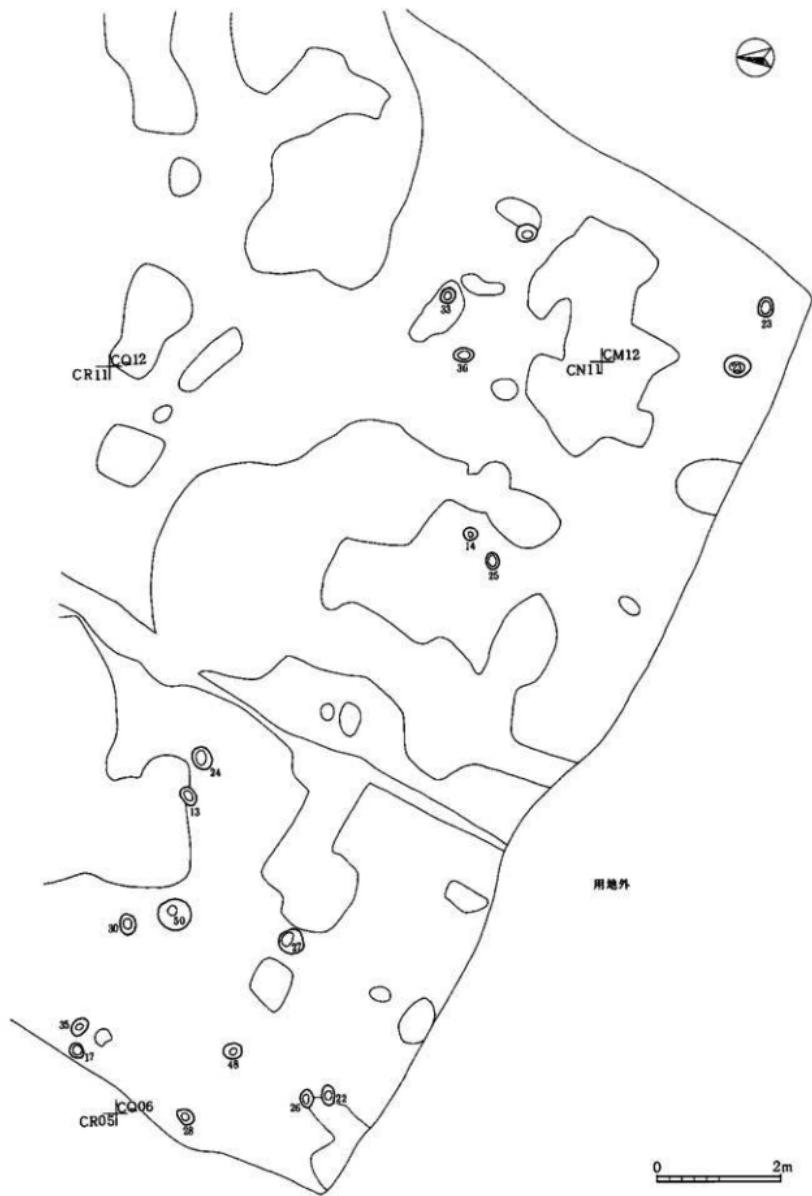
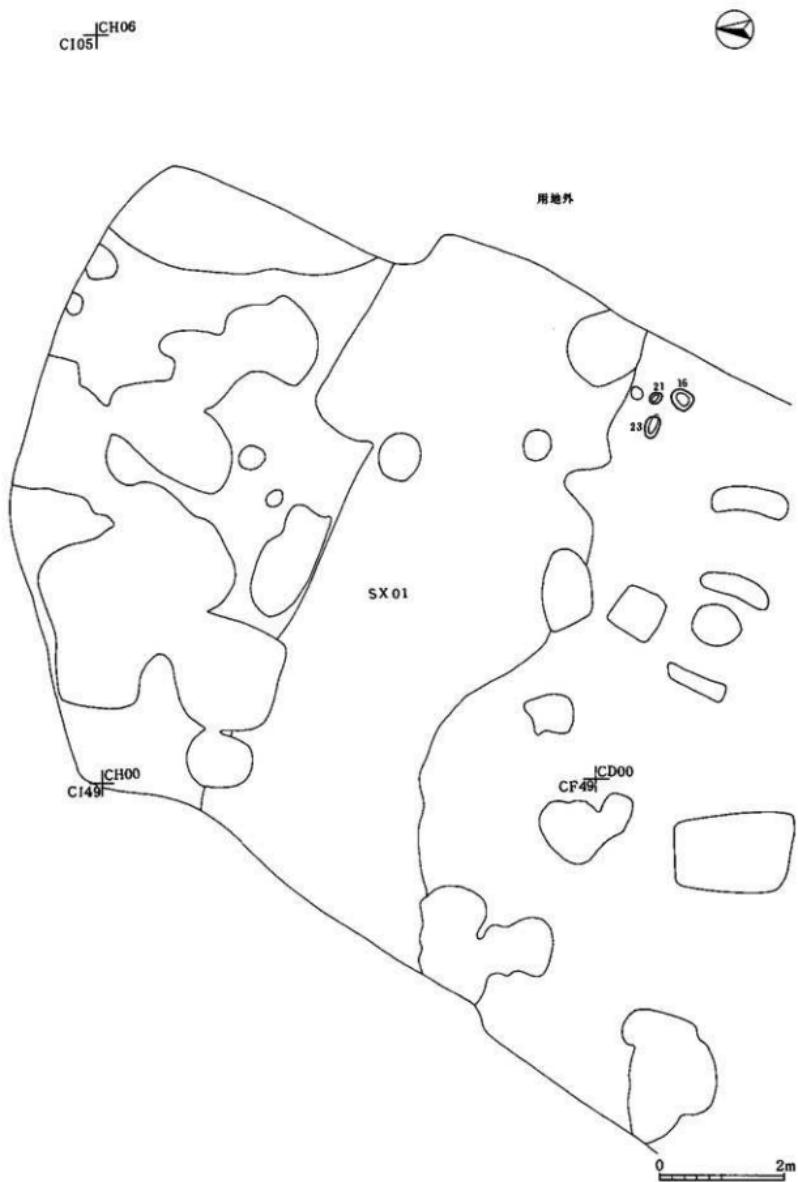
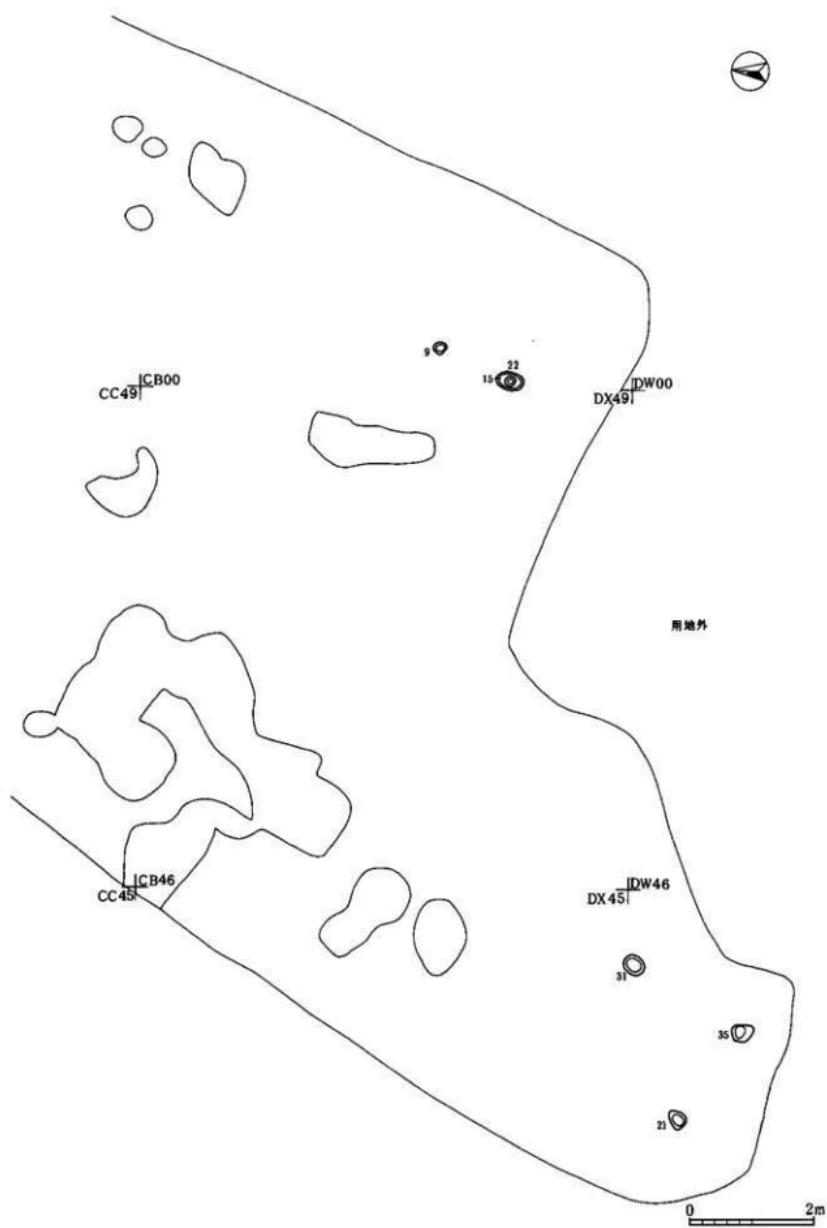


插图20 小穴6



擲圖21 小穴 7



擗圖22 小穴 8

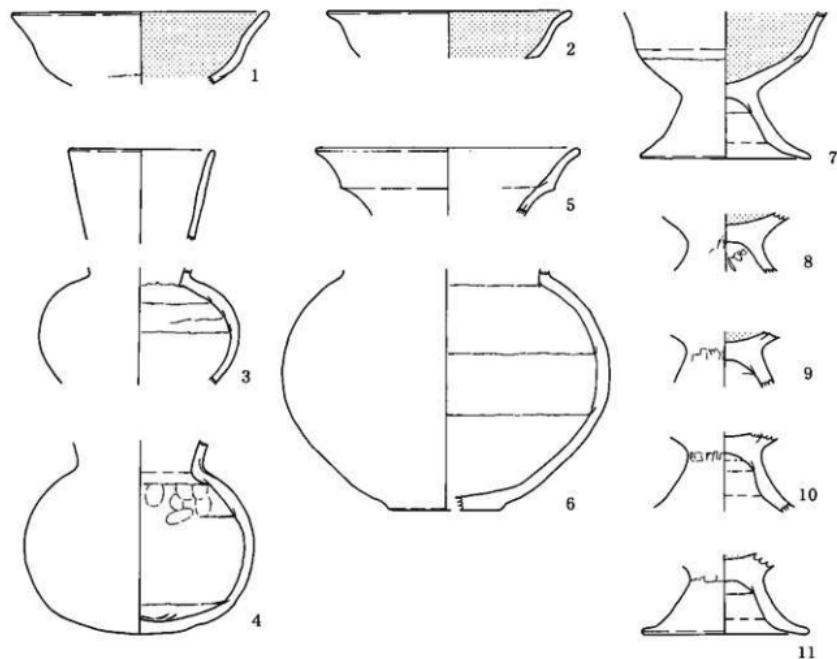
第4節 遺物 (表1・2 挿図23・24 図版10~14)

表1

挿図	番号	遺構	器種	器形	法量(cm)				手法	胎土	焼成	色調	残存
					口径	胴径	底径	器高				外面/断面/内面	
22	1	SM01	土師器	杯	15.6	-	-	-	ナデ・ヘラミガキ /ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/にぶい橙/黒	1/4
22	2	SM01	土師器	杯	14.9	-	-	-	ナデ・ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	橙/にぶい橙/黒	1/4
22	3	SM01	土師器	壺	8.2	12.0	-	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	明赤褐/赤褐/赤褐	1/8
22	4	SM01	土師器	壺	-	13.8	-	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	にぶい橙/にぶい 褐/褐灰	1/2
22	5	SM01	土師器	壺	16.0	-	-	-	ヘラミガキ/ ナデ・ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/灰赤/赤褐	1/8
22	6	SM01	土師器	壺	-	19.8	6.7	-	ヘラミガキ/ ナデ	長石・石英・黒 雲母	良	明赤褐・黒/褐灰/ 褐灰	1/8
22	7	SM01	土師器	高坏	-	-	10.2	-	ナデ・ケヅリ・ヘラミ ガキ/ヘラミガキ*	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/赤褐/黒	3/4
22	8	SM01	土師器	高坏	-	-	-	-	ナデ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/にぶい橙/黒	1/4
22	9	SM01	土師器	高坏	-	-	-	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/にぶい橙/黒	1/4
22	10	SM01	土師器	高坏	-	-	-	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	橙/にぶい橙/黒	1/4
22	11	SM01	土師器	高坏	-	-	10.1	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/にぶい橙/黒	1/2
22	12	SM01	須恵器	甕	20.3	36.3	-	32.0	タタキ/ナデ	長石	良	青風/暗紫灰/暗青 灰	3/4
23	1	SK01	土師器	坏	13.4	-	-	6.0	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	にぶい橙/にぶい 褐/にぶい褐/黒	完
23	2	SK01	土師器	坏	13.6	-	-	6.9	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	明赤褐/褐灰/黒	3/4
23	3	SK01	土師器	坏	13.5	-	-	-	ヘラミガキ/ ヘラミガキ	長石・石英・黒 雲母	良	にぶい橙/褐灰/黒	1/8
23	4	SK01	土師器	甕	10.3	11.2	7.5	9.2	ナデ/ナデ	長石・石英・黒 雲母	良	暗赤褐/明赤褐/明 赤褐	3/4
23	6	SM01	縄文土器	不明	-	-	-	-	ナデ/-	長石・石英・黒 雲母	良	にぶい橙/にぶ い黄土/-	-
23	7	擾乱	縄文土器	不明	-	-	-	-	条痕/指痕正直	長石・石英・黒 雲母	良	にぶい橙	-
23	8	DG22P1	弥生土器	不明	-	-	-	-	-	長石・石英・黒 雲母	良	赤褐/明黄褐/赤褐	-
23	9	SM01	土師器	不明	-	-	4.8	-	回転角切/ クロナダ	長石	良	灰黄褐/にぶい黃 橙/灰黄褐	1/8
23	10	擾乱	陶器	内耳巻	23.9	-	-	-	クロナダ/ クロナダ	長石織粒・黒雲 母	良	黒・褐/明赤褐/明 赤褐	-

表2

挿図	番号	遺構	器種	法量(cm・g)				材質	残存
				長さ	幅	厚さ	重量		
22	13	SM01	不明	(2.9)	(2.0)	0.8	-	鉄	1/2
23	5	SK01	鐵錐	(5.3)	(0.9)	(0.9)	-	鉄	茎部
23	11	擾乱	打製石斧	16.5	6.5	2.6	280	硬砂岩	完



挿図23 SM01

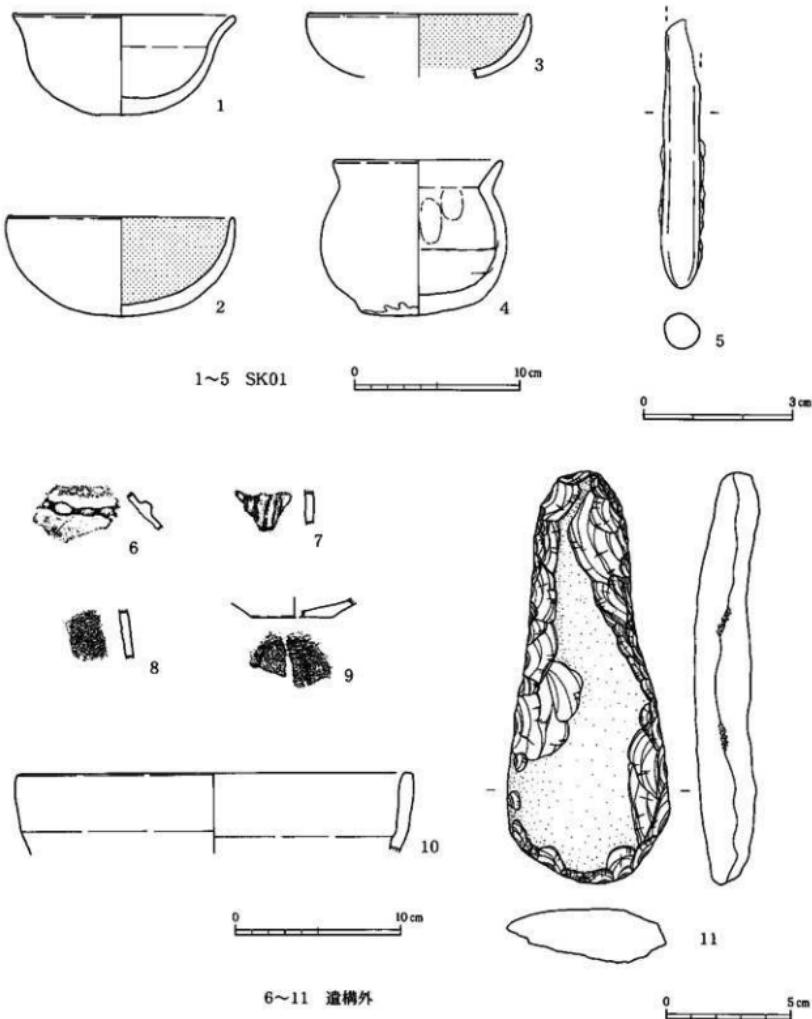


插圖24 SK01：遺構外

第4章　まとめ

今次調査で確認された内容は以上のとおりであるが、今次調査で得られた当遺跡の所見をまとめ、総括したい。

今次調査個所は、段丘の縁辺部に立地し、湿気が少なく良好なポジションである。しかし、調査区全体をみると、当初予想していたよりも遺構の密度は疎らであった。現状の地形をみると、調査区中央部付近、Ⅲ区とⅣ区の間が最も小高くなっている。土層堆積状況を観察すれば、縁辺に位置する北側ほど良く残っており、調査区中央部付近では上層部が削平されて基盤である河床堆積物が露出している。もともとの地形は、段丘の縁辺に並行した微高地のピークが、調査区中央部付近に今よりも更に高くあつたものとみられる。

飯田下伊那には約700基もの古墳が存在したとされており、大半が中・後期のものとみられている。古墳文化の隆盛の背景には、渡来系集団の存在と馬匹文化があることが指摘されており、中期の中頃から本格的に古墳築造が開始されたといわれている。飯田下伊那の中でも、特に座光寺、上郷、松尾、竜丘の4地区には前方後円墳や古墳群が多く築かれ、主な勢力があったとみられている。

鼎地区は疎らで12基の古墳を把握しており、そのうちの4基が切石にある。いずれも後期の古墳とみられている。そのうちの2基は今次調査区西側約100mの位置にある桜瀬古墳と切石大塚であり、残り2基は今次調査区西側約500mに位置し、横穴式石室を有した天伯1号古墳と、同2号古墳である。現在場所は把握できていないが、下伊那史第2巻では切石大塚を中心に、段丘の縁辺に沿ってかつては7基の古墳が存在したとの伝承を掲載している。今次調査結果をみると、段丘の縁辺に周溝墓01が分布する。立地と距離からして、かつて存在した7基のうちの1基である可能性が高い。また遺構分布が希薄な縁辺部の様相を呈しており、切石大塚を中心とした墓域の東限なのかもしれない。そして、切石大塚を中心とした古墳群は、今次調査により古墳時代中期の古墳群である可能性が高くなったといえる。鼎地区で特筆されるのは、切石遺跡群（山岸・天伯遺跡）において、飯田下伊那に古墳が築造されはじめる中期中頃から後期にかけての64軒もの住居址が確認されていることである。このような状況で、中期の集落域と同時期の墓域が発掘調査により確認されたことは、大きな成果であったといえよう。

個々の遺構について述べると、SM01は古墳または低墳丘墓である。調査区外には1~2mの高さの墓地があり、墳丘の残存とみられる。周溝埋土には礫が多くあったが、地山にも相当に礫を含んでおり、葺石であるかの判断はできなかった。調査担当者の感覚としては、葺石にしてはいかにも小粒であった。遺物は、狭い調査範囲の割に比較的多く出土している。須恵器は、飯田下伊那へ須恵器の導入期の初期須恵器である。土師器は、器形が十分にわからないが高杯と壺が多い。土器は細かく割れている。ただし、本遺跡土坑01出土遺物のような割れ方とは異なる。出土状況からして、墳丘上に設置あるいは残置していたものが、周溝が埋没する過程で落ち込んだものとみられる。その他、鉄製品が1点出土している。留金具の類とみられるが、欠損部があり詳細はわからない。

SK01は周溝を持たない墓地で、市内では宮垣外遺跡・八幡原遺跡で類例が調査されている。ただし、宮垣外遺跡は中期後半であるが、八幡原遺跡は中期前半の墓地といった若干の時期の相違がある。本遺構の規模・構造は両遺跡のそれと大差ない。埋土を詳細に観察しながら掘り下げたが土層はレンズ状の

堆積をしており、埋土には遺物と一緒に拳～人頭大の礫が入り込み、棺材や棺を固定する粘土等は確認できなかった。周溝を持たない土壙は木棺直葬の可能性がこれまで指摘されているが、本遺構埋土の観察からその有無を判断することはできなかった。出土遺物をみると、鉄鏃の出土はこれまでの調査例と共通する。土器が出土する事例は、宮垣外遺跡のSK24のみで、初見ではないが比較的稀な例といえる。特徴的なのは、土器が土圧や転落の衝撃で割れたものとは異なり、ちょうど土器焼きで失敗した時、表面が爆ぜる様に破碎しているのと同じような割れ方をしていることである。土器の碎片も土坑内から出土していることから、焼成に失敗したものではなく、完成された土器を埋葬に伴って破碎する祭祀行為があったことが予想される。周溝を持たない土坑内に礫が混在する事例は、市内の確実な古墳時代中期の例としては初見である。ただし、時期不明とした宮垣外遺跡SK22は礫が混じり、遺構の形態も似ている。同時期のものである可能性がある。これらは今後の類例の増加を待つて検討する必要がある。

上郷・松尾地区などの状況から、市内の古墳時代中期における墓の埋葬形態は前方後円墳・円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土坑墓と多様性があることがわかっている。階層の違いが墓の多様性を示すものと考えられている。今次調査区では周溝を有する墳墓と持たない土壙がある。比較するには十分な資料数といえないが、当遺跡においても墓制の多様性が認められる。また周溝内からの遺物の出土状況や、土坑の規模、出土遺物も、基本的にこれまでの調査事例の枠を出るものではなく、追認するものといえ、市内で共通したあり方といえよう。ただし、大規模な集落があるにもかかわらず前方後円墳がないことは他地区と大きく異なるし、調査範囲の問題もあり単純な比較はできないが、馬の埋葬例が確認されなかつたことも大きな相違点といえる。こうした違いが如何なる理由によるものか、今後に残された大きな課題である。

古墳時代以外の様相は、縄文時代ではSM01から後期とみられる土器片が1点、擾乱から条痕文に類似する文様の土器片が出土しているのみである。弥生時代は、中世とみられる柱穴から土器片が1点、擾乱より打製石斧、平安時代も同様に土師器片が周溝墓より出土しているのみである。近隣に各時代の集落の存在は予想されるものの、具体的に論ずることはできない。中世は、内耳鍋の一部が出土し、おそらくは掘建ての建物の痕跡であろう柱穴が分布するが、具体的な建物構造や集落の様相を把握するには至らなかった。古代から中世にかけて、鼎地区は伊賀良庄の中でも有数の穀倉地帯であった。今後は、特に古代から中世の様相を考古学的に探っていくことが、鼎地区を含めた地域の歴史を解明していく上で必要な作業といえる。

以上、古墳時代を中心に気付いたことを記述した。近年、飯田下伊那の古墳文化についての研究は、導入期にあたる中期が脚光を浴びている。その点で切石遺跡群は、当該期の大規模な集落として注目されており、伊那谷の古代社会を考える上で欠くことのできない遺跡である。こうした状況で、古墳時代中期の集落域と近接した場所に墓域が調査されたことは大きな成果といえるが、担当者の力不足が大きく、遺跡の内容を十分に解明することができなかった。この点は大変遺憾であり、深くお詫びしたい。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するあたり埋蔵文化財の保護に多大なるご理解をいただきました、長野県飯田建設事務所には、厚く御礼申し上げます。

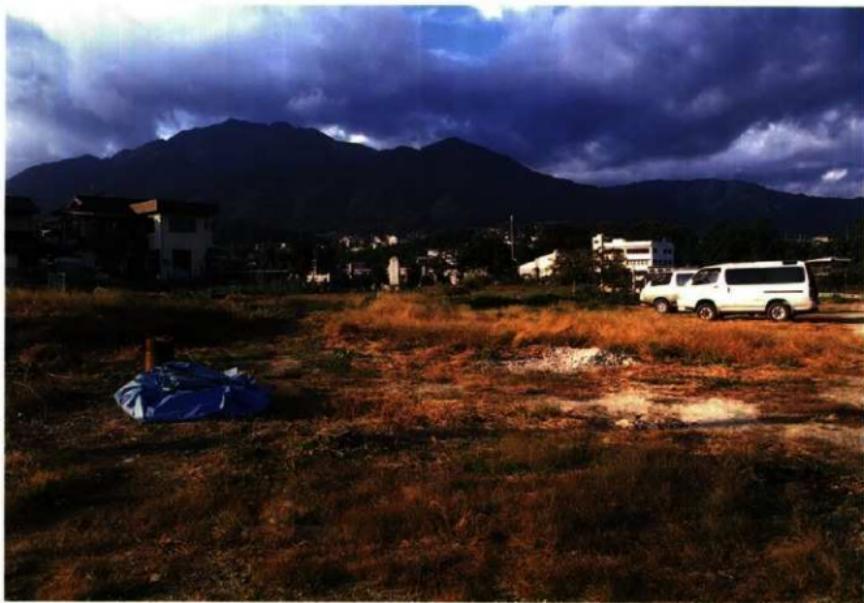
《主要参考・引用文献》

- 岡田 正彦 2006 「南信州の渡来系文化－古墳時代を中心として－」
『飯田市美術博物館研究紀要 第16号』
- 鼎町史編集委員会 1986 『鼎町史』
- 建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所・長野県飯田市教育委員会 1992
『八幡原遺跡 一般国道153号飯田バイパス（3工区）用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 下伊那地質誌編集委員会 1976 『下伊那の地質解説』
- 長野県飯田市教育委員会 1992 『天伯B遺跡（五輪原地籍） 飯田市鼎切石地区社会体育館建設に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』
- 長野県飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡 物見塚古墳 飯田市立病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』
- 長野県飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡 事務所兼住宅建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長野県飯田市教育委員会 1998 『細新遺跡Ⅱ』
- 長野県飯田市教育委員会 1999 『田園遺跡（II）』
- 長野県飯田市教育委員会 2000 『宮垣外遺跡 高屋遺跡 一般国道153号飯田バイパス（3工区）建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』
- 長野県飯田市教育委員会 2001 『井戸下遺跡』
- 長野県飯田市教育委員会 2002 『月の木遺跡 月の木古墳群』
- 長野県飯田市教育委員会 2007 『飯田における古墳の出現と展開』
- 長野県飯田市教育委員会 2007 『恒川遺跡群 官衙編』
- 長野県下伊那郡鼎町教育委員会 1975 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡－縄文時代中期集落址・方形周溝墓・古墳－』
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
－下伊那郡鼎町 その2－』
- 山下誠一 他 1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高坏の出現から消滅までの予察」『東国土器研究 第5号』
- 山下誠一 2003 「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向－発掘調査された竪穴住居址を基にして－」『飯田市美術博物館研究紀要第13号』

写 真 図 版



遺跡遠景



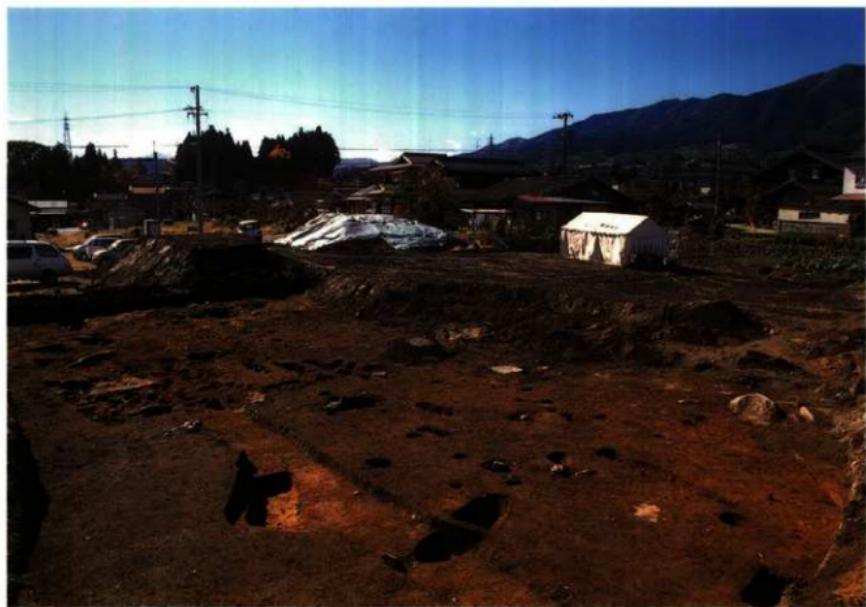
調査前



I区全景



I区全景



II区全景



III区全景

図版 4

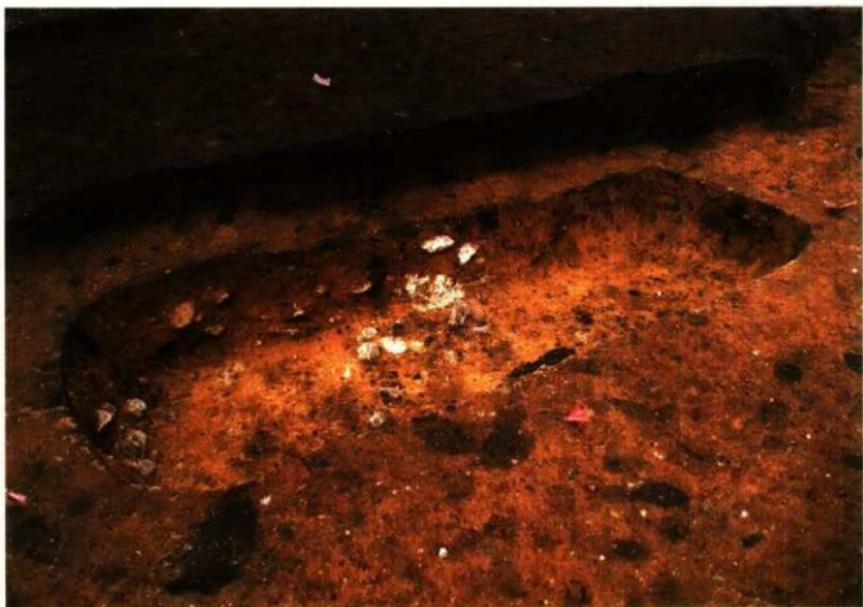


IV区全景



試掘調査区





SK01



SK01 遺物出土状況



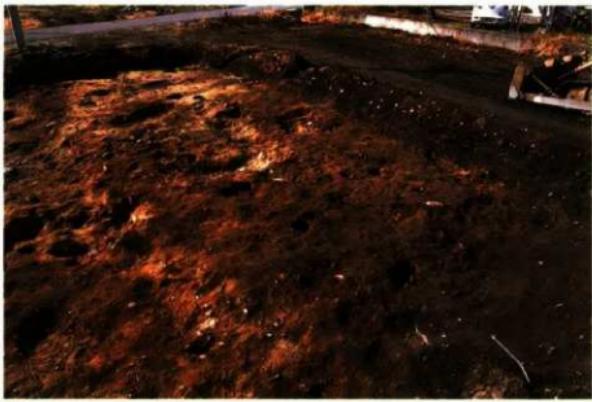
図版 8



SX01



柱穴群（I区）



柱穴群（III区）



作業風景



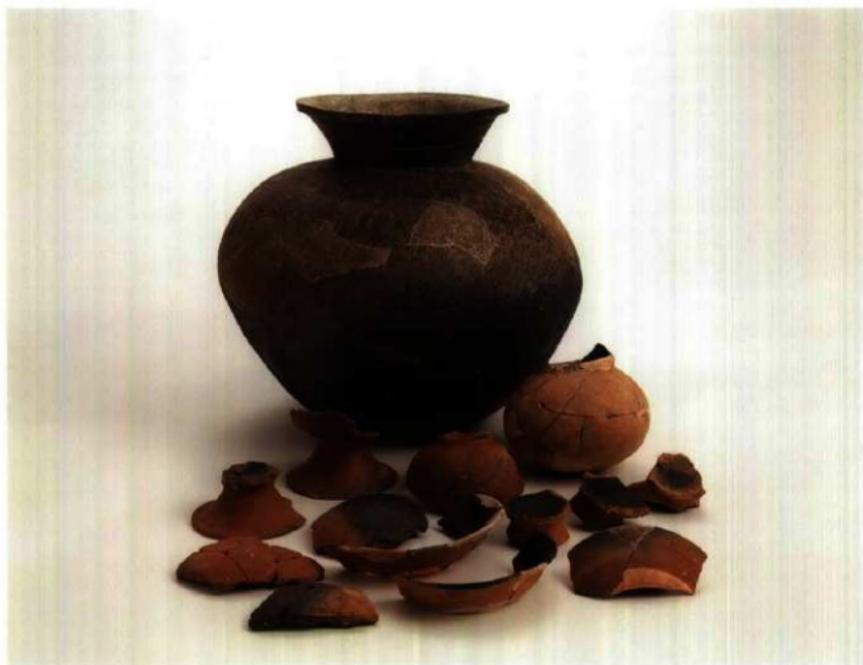
作業風景



作業風景

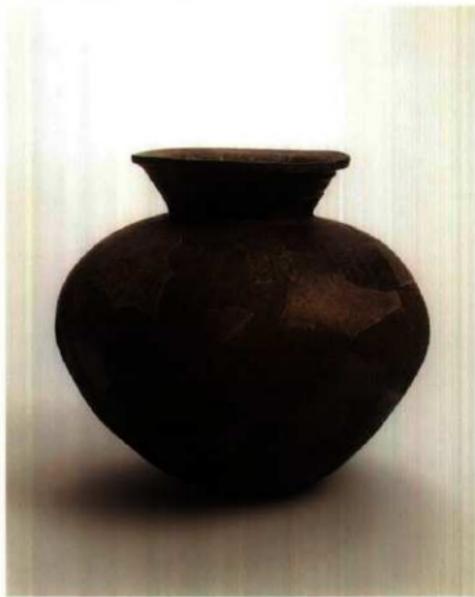


古墳時代 中期 土器



上·右: SM01

左: SM01 · SK01

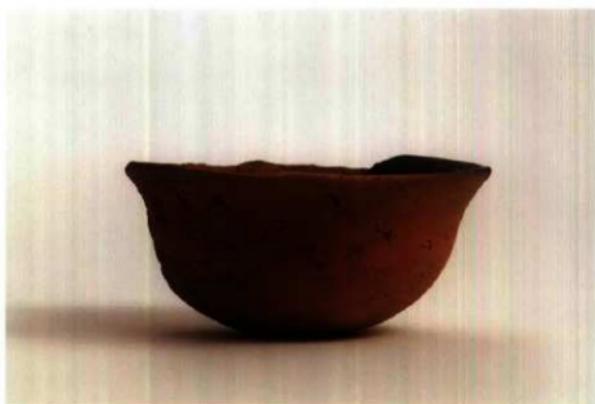




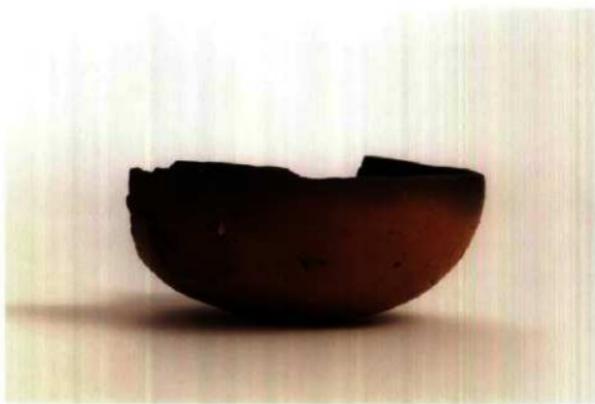
SK01



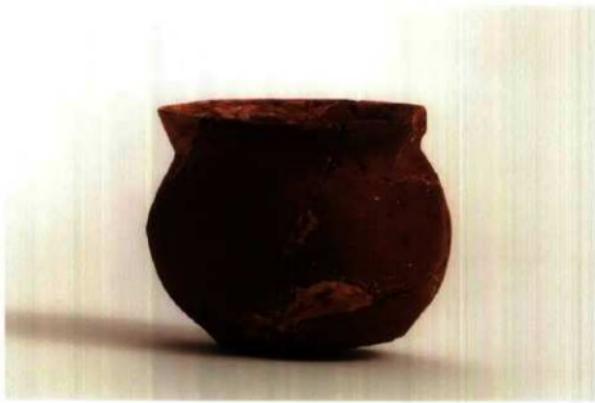
SK01 土器破損狀況



SK01 No.1



SK01 No.2



SK01 No.3



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きりいしいせきぐん								
書名	切石遺跡群								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	羽生 俊郎								
編集機関	長野県飯田市教育委員会								
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL 0265-22-4511								
発行年月日	西暦2009年2月(平成21年2月)								
ふりがな 所収遺跡名	所在地	ふりがな		コード	北緯 °'\"/> 35° 30' 34"	東経 °'\"/> 137° 48' 31"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号						
きりいしいせきぐん 切石遺跡群	いいだし市鼎切石 4682-2	20205				平成19年 10月 15日～ 平成19年 12月 19日	1512m ²	道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
切石遺跡群	墓 集落址	古墳時代 中近世	周溝墓・土坑 柱穴	土器・金属器		古墳時代中期後半 の土坑墓と古墳あるいは低墳丘墓の 周溝を調査した。			
要約	古墳時代中期後半の土坑墓と、古墳あるいは低墳丘墓の周溝を調査した。 調査区西側にある切石大塚を中心とした古墳群の縁辺部にあたるとみられる。								

切石遺跡群

2009年2月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
